

# グローバル化に向かう出稼ぎベトナム人の労働実態 —黎明期の村落出身の海外労働者と ロンビエン卸売市場の運搬者のライフヒストリー—

長 坂 康 代

## 1. はじめに—ベトナム人の国内移動と国際移動における「都市性」の問い

筆者はベトナムの首都ハノイの中心地、旧市街内のハンホム通り下町商店街で長年にわたって定点観測を行い、塗料販売店をめぐる調査研究を行ってきた〔長坂 2011、2015ほか参照〕。その過程で村からの出稼ぎ労働者と接点をもち、2007年からはハノイのロンビエン卸売市場で出稼ぎ労働者に帯同し、労働を共にしながら、ベトナム村落民が、同時にベトナム中下層民衆が金銭経済さらにはドイモイ経済開放以降の、特にグローバル化の急進な資本主義にどうつながって生きるのか、の参与観察を続けてきた。

地縁や友人の紹介、都市民衆が求めるキャリア（英語などの語学力）があれば、都市で仕事に就くことは比較的容易だが、そういったスキルを持たない者が都市で現金収入を得ることは難しい。「仕事あっせん会社」に登録して、都市経済に直結する仕事に従事することもできるが、すぐに仕事が見つかるとは限らない〔長坂 2019〕。

しかし、この10年ほどで、10代後半から20代前半の村の若者には、その「都市労働の登竜門」以外に、借金をして台湾、韓国、中国など極東アジア経済中心で海外労働するという選択肢ができた。労働目的でありながら留学生として来日する「出稼ぎ留学生」も多い。

新潟県内でも、ベトナム人の小集団を見かける頻度が高くなった。県内の外国人労働者は10,430人（2018年10月末時点）、ベトナムが最も多く3,106人で、外国人労働者数全体の29.8%を占めている。そのなかでも技能実習生としては2,167人で全体の69.8%を占めており、二番目に多い留学の644人（同20.7%）を大きく離している。近年、技能実習制度による技能実習生の事例に関する論文が多数出るようになった〔石塚 2014、加藤 2019、西川 2019〕。したがって、これまでのベトナム—日本移動の研究は、かつての難民を中心に考察したものから、近年の技能実習生とその法的整備に関わる論考に集中している〔グエン 2013、二階堂 2019〕。

そこで、本論は、これまでに論じられていない、移動の経過やルートを問うなかで、海外への出稼ぎ労働送り出しのために、また村落生活での金銭経済維持のためにいかなる資源を使うのか、それは村落にはない資源で、都市のどういう資源なのか、海外資源とどのように結びつくのか、を本論で問う。

すなわち、ベトナム村落民の国内移動と国際移動を問い、そのなかでのベトナム「村落—都市（首都ハノイ）—海外」の接続の中にある「都市性」を都市人類学の課題として、その特性を析出することを、本稿の目的とする。今日では、SNS情報の手段によって、ベトナム「村落から都市」「都市から海外」が都市（首都）でのワンクッション接続を省いて接続される情報収集のチャンスが増大し、「村落—（都市）—海外」という連続体、もっと直接性を増して「村落—海外」が直接つながる時代になっている〔長坂 2018a、2018b〕。こういう時代性のなかの「都市性」の特性を本稿で問うものである。

この国内移動と国際移動の観点からすると、1986年のドイモイ政策以降、村落から都市に出てくる出稼ぎ労働者は、都市で情報を得てきた。このグローバル化時代でも、都市で築いた人的ネットワークを駆使していち早く都市民同様に国際的情報も得て、次の世代が東アジアの経済中心に繋がっている。

本稿では、ベトナムの村落から直接日本で働くようになった、黎明期である村落出身者の技能実習生について、2008年当時の過去の聞き取りを初出の形で提示し、現在の状況に照らして再検証する。また、今までのベトナム社会科学や人類学で研究のない、出稼ぎ労働者の生活を支える市場労働の収入簿（2019年半期分）の資料を明示し、ベトナム人の国内移動と国際移動についての新規性ある考察を行う。

## 2. 「技能実習生」としての海外労働—都市から農村の若者へ

1993年に日本国内で「技能実習制度」が導入され、2000年代初頭から、ハノイの街中でも「技能実習生」というワードが聞かれるようになった。祖父の代からハノイの中心地ハンホム通りに住み、外国人との接触に慣れている親の勧めで高校生の時から日本語を学んでいたトゥーは、大学卒業後に大学で得たスキルと日本語を活かしてハノイの日系企業に勤めた。東京・新宿での3ヶ月の研修も行ったが、スキルアップするために転職しようとした職が、姉フオンが勤める送出し機関の委託による技能実習生の監督であった。技能実習生を引率して3年間大阪に住み、生活面から仕事に

至るまで全般の面倒をみるという仕事である。このような技能実習生に關する情報は、都市の20代の若者で共有されていた。ハノイにある日系ホテルのマネージャーの男性は、技能実習生として広島県の牡蠣工場で働いた。その経験を活かして、帰国後はホテルに就職した。当時は、日本語教師や送出し機関ではなく、帰国後に技能実習生としての「キャリア」を活かした職業の選択をすることができた。ベトナム人労働者の送出し機関から、日本の企業を紹介してくれたら報酬として10万円出すと持ちかけられたりしたこともあった。

毎日ハノイの中心地、ハンホム通りの塗料販売店にgôm cánh kiến = シェラック（セラック）を卸していたハタイ省の女性フエ（1954年生まれ）は、毎朝5時に家の近くを通るトラックの荷台に、荷物といっしょに載せてもらい、1時間かけて6時にハノイのハンホム通りに来ていた。塗料販売店で直接発注をうけ、11時にバスに乗って1時間かけて家に戻って、翌朝ハンホム通りに届けるという生活を20年間送っていた<sup>1)</sup>。

フエは、毎日数時間をハンホム通りの各塗料販売店で過ごすなかで、店主や従業員との雑談から〔長坂 2010〕、技能実習制度で「日本に行けば稼げる」と聞き、次男チュオンを日本で働かせたいと思った。シェラックづくりは家内制手工業である。シェラックは1回で約15kg生産する（写真1）。毎日、家族中心で朝4回と夕方4回作っているが、海外から入ってくる既製品や化学製品に押されて、将来への不安があった。そこで、送出し機関に勤めるハンホム通りに住むフォンに、チュオンも日本に行かせたいと懇願した。フォンの家も以前は塗料販売をしていたため、フエはフォンの親と顔なじみだった。この「伝手」を最大限利用して、フエはチュオンの日本行きをフォンに頼み込んだのである。



写真1 家族でシェラックづくり  
(2007.9)

フエに何度も頼まれたフォンは、チュオンの書類を整え、フエは「チュオンが給与を送金すること」を期待して、保証金含め240,000,000ドン（約120万円）の借金をした。2008年2月、チュオンは他のベトナム人とともに愛知県大府市の工場で働くことになった。チュオンはフエに「（同年の）12月に仕送りする」と連絡もしている。しかし、3年の雇用期間を経

ずに、フエは2年でチュオンを帰国させた。給与手取り6万円を散財して、一度もベトナムに送金することがなかったからである。

契約では、雇用期間終了後の3年後、労働者に150,000,000ドン（約75万円）が返金され、90,000,000ドン（約45万円）は会社が受け取ることになっていたが、チュオンは雇用期間の途中で帰国した。そのため、送出し機関からの返金はなく、借金だけが残った。

当時、まだ20代前半（2007年当時23歳）のチュオンは、ハタイ省の自宅で家族（父、母、兄）といっしょにシェラックをつくる毎日で、都市ハノイの生活すら知らなかった。人手を補うために、時々近隣の女性2名が手伝いに来るが、その給与は15～18時の3時間で15,000ドン（約75円）、午前・午後の場合は30,000ドン（約150円）である。家族経営の仕事しか知らず、自国の都市での労働経験なく、村からダイレクトに日本に行って働き、手にしたことがない現金を得て、金銭感覚も生活も変わった（写真2）。



写真2 チュオンの休日、名古屋にて  
(2008.7)

村落から海外労働に行った黎明期は、今のようにスマートフォンが普及していない時代でSNSなどでの情報共有も乏しく、日本で得られる情報も少なかった。チュオンは帰国後、家族とともにシェラックをつくる仕事に戻り、その後、村で結婚し、フエを安心させた。

こうした「村の若者」が日本へ行くようになるのが主流になるのは、これ以降であろう。都市から村の若者に、その対象が移行していった。フンイエン省のA村で、日本行きを望む若者を探す斡旋ブローカーが村の男性を木の陰に連れて行き、日本での仕事内容や待遇について話していたのを見かけたことがある。ハタイ省のB村では、家の扉に「日本労働募集」という広告を貼っていた（写真3）。

現在、技能実習生についての情報共有は、若者間でSNS（Facebook）を通して行われるようになってきている（写真4）。借金をしてまで「アメリカンドリーム」ならぬ親族のために稼ぐ「ジャパンドリーム」を夢見て、村から日本へ「移動」することの抵抗がなくなっているといえる。



写真3 技能実習生の募集



16人 コメント1件

いいね! コメント シェア

写真4 日本での労働条件が掲載されている (2018.2)

### 3. ハノイ近郊村からの出稼ぎ労働者にみる国内移動

日本で求める「技能実習生」の年齢層は、高校卒業後の19歳から20代後半までが多いが、それより上の世代（主に40～50代）の出稼ぎ労働者の移動は、国内の都市部であった。

#### 3-1. 1990年代から始まる村落から都市への移動と労働

ベトナム南北統一後の1975～1985年は農村部から都市部への移動が制限されていたが、1986年のドイモイ政策以降、移動が可能になった。ハノイに隣接するフンイエン省マオスエン村に住むリュエン（1963年生まれ）は、幼い子ども2人（息子トゥアンアイン、娘クイン）の育児を夫に任せて、1994年に姉のトゥエンらとともにハノイに出てきた。出稼ぎ労働者が多く住むロンビエン地区のバラックで住み、トゥエンと一緒に天秤棒1本をもってロンビエン市場で働き始めた。

ロンビエン市場は、果物や魚介類を中心に、野菜、肉も取り扱う総合卸売市場である。市場内の果物店の脇には、祭事具用品を扱う問屋が連なっていて、旧暦1日と15日間近には、果物と一緒に祭事具を購入、運搬している光景をみかける。ここでは日本の市場のように機械化されることなく、人手によって荷物が運び出され、小売業者のもとに届けられる。この



市場はハノイ近郊の農村から来た「出稼ぎ労働者」にとって、「都市の経済」に組み込まれる最初のフィルターであり、出稼ぎ労働者が「とりあえず」何らかの仕事を得て、現金収入を得ることができる空間なのである。

[長坂 2019]。

リュエンは、小売業者がロンビエン市場で卸売店から買い付けた果物を、天秤やリヤカーをつかって、市場外の小売業者の車や小売店まで運搬するバイク運搬人の元まで運搬する仕事を担っている。市場で扱う果物は、南アやオーストラリア、アメリカなどからの輸出品が年々増えている。リュエンは市場で果物を通してグローバル化時代の到来を感じ取っていた。

2008年6月、それまで天秤担ぎをしていたリュエンは、ほぼ同時期に市場で仕事を始めたロイと2人でリヤカーを購入した。出身村の違う2人が親しくなったのは、小売業者が購入した果物を市場内から市場外に運搬し、依頼されたその果物を一時的に置く場所が隣同士だったからである。毎日市場で顔を合わせ、時に同じ依頼者の荷物運搬を引き受け、互いに手伝い、信頼関係を築いていった。

リュエンは、運搬人仲間だけでなく、卸売業者と小売業者の信頼も得られている。2015年8月、毎日果物の買い付けに来る小売業者のオアイが過労で市場に来なかった日があった。前日にオアイがリュエンに電話連絡し、当日リュエンが各卸売業者からオアイが注文した果物を買ひ（掛け売り）、それらをリュエンがいつも通り市場外まで運んで路上にまとめた。いつもならばオアイが購入した果物を自分のバイクに載せて小売店まで自ら運ぶのだが、リュエンが運搬バイク人にオアイの店の住所と電話番号を伝えて、荷物を運んでもらった。時には、リュエンが掛け売りの代金を小売業者から受け取り、小売業者に代わって卸売業者に精算に行くこともある。

天秤棒1本あれば誰もが働くことができる市場は匿名性があり、とくに繁忙期など混雑して人混みができるときには秩序を保つ社会構造が崩れ、頻繁に暴力行為や窃盗がある。一見の観光客は貴重品をもっていかないほうがよいと言われる、ハノイでは安全性の低い空間でもある。このような環境でリュエンが名前と呼ばれ、顧客がつくほど信頼を得られるのは、長年の労働の蓄積によるものである。

リュエンの夫は心臓の病気を煩っているため、十分に働くことができない。マオスエン村で子どもの世話をしたり米作りをするほか、犬を飼ったり猫を飼って転売したり、集落施設の軽作業を手伝うなどしていた。リュ

エンは夫の収入をあてにすることはできなかったのも、一家の大黒柱として、ロンビエン市場での荷物運搬だけでなく、1998年に知人の紹介でハンホーム通りの塗料販売店での販売員として働いた。現在も勤める塗料販売店は2店舗目で、3食ついて、前販売店のように家事労働せずに販売のみで条件がよいが、個人経営の店で有給制度などあるわけではなく、休めばその分給与から天引きされる<sup>2)</sup>。

リュエンは、ほぼ月1回休みをとってマオスエン村に帰省し、家族に生活費を渡していた。子どもが小学生だった頃は、使い終わった学校の教科書を塗料販売店でもらって、新学期が始まる前に新年度の準備をするなど、切り詰めた生活を送ってきた。

2010年、リュエンの娘クインと同年で、塗料販売店の店主トゥイの息子クアンが、アメリカの高校に進学するために英語の予備試験を受けた。寮費を入れて年間400万円かかるが、大学含めて計7年間をアメリカで過ごさせたいと計画していた。トゥイは、クアンに家庭教師をつけて勉強させていた。ハノイで働きづめのリュエンは、都市で多くの情報を得ると共に、こうした都市と村落の格差をさんざん目の当たりにしてきた。リュエンは、将来の職業によって人生が変わることも理解していた。そのため、リュエンは自分の子どもが自分のように苦労しないようにと、都市で情報を得て、人的ネットワークを最大限利用していくのである。

### 3-2. 学費を捻出するための情報収集と親族・店主ら周囲の協力

リュエンにはマオスエン村で両親と同じ敷地に住む長兄以外に、姉トゥエンや兄ヒエンがいる。トゥエンはリュエンとハノイに出てからロンビエン市場で働いたり、ハンホーム通りの塗料販売店で働いたりしていた。リュエンと年子の兄ヒエンは軍に属しており、ハノイで比較的恵まれた生活を送っている。塗料販売店勤めを辞めて一時期マオスエン村に帰って生活していたトゥエンは、ヒエンを頼って、ハノイのヒエン家に頻繁に出入りしていた。

2012年、ヒエンはハノイのコーザイ区の中古の平屋から20階建ての新築マンション（2LDK）の最上階に引っ越した。軍の幹部のため、400,000,000ドン（約200万円）のみ自己負担で、他は国が負担してくれた<sup>3)</sup>。そこに、リュエンの姉トゥエンは、ヒエンの息子ゴックアイン（生後9ヶ月）の世話を手伝うために同居することになった。2013年、ヒエンの娘タオが、通信会社が母体の私立FPT大学に進学すると、毎週末、ヒエンがハノイ中心部から40kmのソントイ区の学生寮まで車でタオを迎えに行って

いた。

2014年はクインが高校を卒業し、大学に進学する年であった。リュエンはハノイの勤め先（塗料販売店）やロンビエン市場、兄ヒエンから情報収集をしていた。リュエンは「自分は苦勞したが、こういう苦勞は自分の代で終わりにしたい」と、学費を工面してクインも4年制大学に進学させようと決めていた。

クインは、フンイエン省の高校を卒業後、従姉のタオが在籍している私立大学に進学した。学力面で選択肢が狭まったなかで、コンピューターの技術を学ぶことができること、タオが進学していることが決め手だった。しかし、学費が他大学より高額で、3ヶ月で32,000,000ドン（約16万円）ほどかかる。このほか、英語の勉強のためにインドネシア、マレーシア、タイ、フィリピンなどASEAN諸国へ行く費用もかかる。ベトナム国内の私立大学のなかでも学費が高いが、英語の勉強をするので就職しやすいというもの、リュエンにとって魅力的に感じた。それでも、クインの進学先について、ロンビエン市場でも「学費の支払いが大変だ」と果物販売員に話していた。しかし、市場で天秤担ぎをする女性も子ども2人を大学まで行かせたと聞き、リュエンも参考にしようと考えをあらためた。

リュエンは、タオと同様に大学で寮生活を送ることになったが、持ち物が少なく、ボストンバッグ1個で入寮した。トイレとシャワーが付いた4人1部屋で同学年の学生との共同生活である。クインと同室の学生の出身はソントイ区、ナムディン省、ハイフォン市、クインはフンイエン省と、それぞれハノイ近郊からであったが、地方の富裕層の子女ばかりで、4人それぞれのパーソナルスペースであるデスク付ロフトベッドに置かれた私物を見れば、その経済格差が一目瞭然であった。

日曜になると、多くの学生が実家に帰省する。クインは従姉のタオが帰省するのに合わせて、ヒエンが車で迎えにくると一緒にハノイのヒエンの家に帰った。ヒエンの家に行くと、時々リュエンも行って、ヒエンの家で夕飯を共にした。

クインが進学した大学は、1ヶ月の学費や寮費を含めて毎月の諸経費が700USDほどかかる。初年度は、リュエンのもう一つの働き先である塗料販売店と兄に前借りして支払った。同世代の子どもがいる店主のトゥイが、入学金と1年分の学費を立て替えてくれた。兄のトゥエンは寮費を立て替えてくれた。

2014年、当時のリュエンの塗料販売店での給料は、1ヶ月4,500,000ドン（約22,500円）だった。息子トゥアンアインは、フンイエン省の大学で寮



生活を送りながら製造技術を学んでいた。しかし、トゥアンアインがベトナム企業で働いても娘クインの学費を捻出できないと思ったリュエンは、トゥアンアインが2年後（2016年）に卒業したら日本で3年間働かせようと考えていた。技能実習生として500,000,000ドン（約250万円）を稼いだ話を噂で聞いたことがあったからだ。市場労働のためにリュエンの隣で横になっている筆者に「トゥアンアインには、技能実習生として日本に働きに行ってほしいから、（筆者に）手助けしてほしい」と何度も頼んできたことがある。前述のチュオンの失敗例を知っていたが、それでも現金収入を得るための選択肢が限られていて、息子に託す気持ちで必死だった。

2016年、トゥアンアインは大学を卒業後、技能実習生の道を選択せず、韓国系企業のサムスンに入社した。日曜休みで、土曜は隔週で休み、月23日間という労働条件で、バックニン省の工場で技術者として働いている。

当時、リュエンの塗料販売店の月収が5,000,000ドン（日本円で約25,000円）だったとき、トゥアンアインの初年度の月収は600USDだった。トゥアンアインは、この600USDのうち毎月400USDを妹クインの学費に充て、リュエンの負担を軽くした。サムスンに入社してすぐ、トゥアンアインは家族割りが適用されるサムスン製のスマートフォンをリュエンにプレゼントした。これで、ハノイ（フックタン区、ソントイ区）、バックニン省、マオスエン村と、家族が離れていても、これまで以上に互いに連絡が取りやすくなった。

同年、姉のトゥエンの息子カイン（1986年生まれ、当時30歳）は、技能実習生として、ベトナム北部の各地から出てきた5人とともに岐阜県関市で働くことになった。日本での食事が合わず、食べるものがなくて痩せていくというカインの話を聞いてトゥエンは心配になり、ビーフジャーキーなどベトナム食品を送ろうと思ったが、食料の持ち込みの厳しさに国際移動の大変さを知った。日本の技能実習生制度の矛盾や借金を返せないという話もちこちから聞くようになり、リュエンはトゥアンアインを日本に行かせなくてよかったと思うようになった。

2018年には、トゥアンアインがお金を出して、マオスエン村の実家にキッチンとシャワー、水洗トイレをつくった。サムスンのドラム式洗濯機も購入して室内に設置した。外で洗い物をせずにすみ、庭にあるトイレに行かなくてもよくなり、村での生活が快適になった。ハンホーム通りの塗料販売店の店主トゥイが不動産をいくつも購入し、それを賃貸にして家賃収入を得ているのを知っていたリュエンは、自分も投資目的で、マオスエン村の自宅近くの200万円の家を息子のトゥアンアインと折半で購入した。

リュエンは店主トゥイと同じように自分の銀行口座もつくり、タンス預金ではなく銀行に現金を預けるようになった。村落からの出稼ぎ労働者が都市で情報を得て東アジアと繋がり、村のなかでは成功者として富裕層になる。リュエンは、都市での労働を通して国際性も得たのである。

トゥアンアインの収入で、リュエンにも少しずつ経済的余裕が出てきて、自分の美容にもお金をかけるようになった。2019年3月、クインの結婚に向けた準備として、リュエンはハノイ市内で5,500,000ドン（約27,500円）かけて、アートメイク（眉、唇、アイライン）を施した<sup>4)</sup>。

2019年7月、単位不足で1年留年した娘クインが、大学を卒業した。卒業してすぐ就職できなかったため、5ヶ月間、英語の学校に通って就職を目指した。2019年12月、クインは、大学生のときから交際していた年上の男性ラム（当時26歳）と結納をした。ラムはハノイのコーザイ区にあるFPT系列の会社に勤めていて、給料は10,000,000ドン（約5万円）で生活が安定している。ラムの両親から結納金30,000,000ドン（約15万円）もらったが、2020年2月のクインの結婚式には、オートバイの購入40,000,000ドン（約20万円）を含めて、全120,000,000ドン（約60万円）なかった。

### 3-3. ロンビエン市場での労働状況（2019年）

2018年にロイが高齢を理由に市場労働をやめて一人になったが、それでも、リュエンは、ロンビエン市場でのリヤカー運搬とハンホーム通りの塗料販売店の店員の仕事を続けていたのは、クインの結婚を控えていたからである。結婚式にかかる費用を捻出するために、ロンビエン市場で働き続けた（写真5）。



写真5 リヤカーでの果物運搬  
(2009.9.1)

市場に入ることができるリヤカーの台数は、市場内にある行政の「ロンビエン市場管理委員会」によって制限されている。リヤカーは大小2種類あり、リヤカーの横にはそれぞれ登録ナンバーがついている。リュエンとロイは、大きいリヤカーを1台1,200,000ドン（約6,000円）で購入した〔長

坂 2019〕。市場外のリヤカー保管庫を利用するため、毎月の保管料として150,000ドン（約750円）かかる<sup>5)</sup>。この他、市場内の利用料として、毎

月ロンビエン市場管理委員会に160,000ドン（約800円）支払っている。これらの費用はリュエンとロイで折半していた。これも、ロイが市場労働をやめてから全額一人で支払っている。

以下、本稿で提示する資料は、リュエンのロンビエン市場での収入簿の記録で、そのなかから、2019年1月から6月までを書き写したものである（写真6）。

旧暦の1日と15日は祖先崇拝をしたり、宗教施設に供物を供えたりするため、果物が売れる。そのため、1、15日とその前日は市場内での販売が盛んになり、リュエンの運搬料も増える。必然的にリュエンの収入が増える。表の1/14（旧暦1月14日）は800,000ドン（約4,000円）、1/15は700,000ドン（3,500円）であるが、1/16になると300,000ドン（約1,500円）になる。収入0は、休んだ日で収入がないことを表している。歩合制なので、市場を休めば収入はない。

写真6 リュエンの2019年の収入記録帳（2020.2）

全体の収入をみると、1月は旧正月で8日まで休み、9日が仕事始めだったので、1月の収入は8,500,000ドン（約42,500円）である。2月以降6月までは、安定して55,000円以上を稼いでいる。リュエンは市場労働が長く、市場内の卸売業者からも、市場に買い付けに来る小売業者からも信頼が厚い。そのため、毎日リュエンに運搬を依頼する小売業者が多く、市場で確実に仕事がある。

日々の労働収入は不安定だが、ハンホーム通りの塗料販売店での月収（ただし塗料販売店では食事付）を上回る収入にはなる。このロンビエン市場は、スキルや能力がなくても現金収入を得たい村落からの出稼ぎ労働者に門戸を開いている労働提供の場であり、ここで経験を積んで信用を得られると、天秤棒からリヤカーでの運搬になり、さらなる現金収入を得ることができるのである。

この市場で働くのは、卸売の店主を除き、卸売の販売員の大半もまた出稼ぎ労働者である。日本で「外国人技能実習生」として3年働いたあと、故郷では仕事がなく、ロンビエン市場で、トラックからスイカの荷下ろしをしたり、リンゴの卸売販売をしたりしている者もある〔長坂 2019〕。若者が村落から日本に行って技能実習生として3年間日本に滞在した後、

1ヶ月以上1年未満の一時帰国が義務づけられている。市場は、日本経験をした村落の若者にとっても短期間労働できる融通のきく就労の場所にもなっている。

表 ロンビエン市場でのリュエンの収入状況 2019年1月～6月(作成:長坂康代)  
(1,000ドン)

旧暦	収入	旧暦	収入	旧暦	収入	旧暦	収入	旧暦	収入	旧暦	収入
1/9	300	2/1	800	3/1	650	4/1	900	5/1	700	6/1	450
1/10	600	2/2	300	3/2	0	4/2	450	5/2	300	6/2	400
1/11	400	2/3	250	3/3	550	4/3	300	5/3	350	6/3	500
1/12	550	2/4	250	3/4	500	4/4	0	5/4	500	6/4	600
1/13	550	2/5	150	3/5	100	4/5	0	5/5	300	6/5	0
1/14	800	2/6	500	3/6	350	4/6	400	5/6	400	6/6	600
1/15	700	2/7	250	3/7	600	4/7	500	5/7	0	6/7	500
1/16	300	2/8	300	3/8	400	4/8	400	5/8	300	6/8	500
1/17	350	2/9	350	3/9	500	4/9	400	5/9	300	6/9	450
1/18	500	2/10	250	3/10	500	4/10	300	5/10	250	6/10	400
1/19	400	2/11	350	3/11	450	4/11	400	5/11	400	6/11	600
1/20	250	2/12	250	3/12	500	4/12	500	5/12	500	6/12	0
1/21	300	2/13	350	3/13	300	4/13	750	5/13	500	6/13	600
1/22	300	2/14	700	3/14	750	4/14	700	5/14	600	6/14	600
1/23	250	2/15	700	3/15	600	4/15	500	5/15	600	6/15	700
1/24	300	2/16	250	3/16	400	4/16	300	5/16	400	6/16	350
1/25	300	2/17	350	3/17	500	4/17	200	5/17	500	6/17	500
1/26	200	2/18	300	3/18	400	4/18	0	5/18	500	6/18	500
1/27	0	2/19	0	3/19	400	4/19	400	5/19	450	6/19	500
1/28	350	2/20	350	3/20	300	4/20	500	5/20	500	6/20	450
1/29	800	2/21	200	3/21	500	4/21	500	5/21	600	6/21	450
1月合計	8,500	2/22	300	3/22	550	4/22	600	5/22	450	6/22	400
		2/23	600	3/23	600	4/23	300	5/23	450	6/23	550
		2/24	550	3/24	400	4/24	450	5/24	500	6/24	700
		2/25	350	3/25	600	4/25	300	5/25	400	6/25	650
		2/26	400	3/26	0	4/26	400	5/26	400	6/26	0
		2/27	400	3/27	0	4/27	300	5/27	400	6/27	400
		2/28	250	3/28	860	4/28	400	5/28	500	6/28	500
		2/29	350	3/29	500	4/29	600	5/29	500	6/29	800
		2/30	700	3/30	900	4月合計	11,750	5/30	750	6月合計	13,650
		2月合計	11,100	3月合計	13,660			5月合計	13,300		

#### 4. まとめー出稼ぎ労働者のライフヒストリーからみる都市性の再考

1986年のドイモイ政策以降、現金収入を得るために村落から都市に出て働く、出稼ぎができるようになった。それによって、村落の人びとの職業の幅が広がったが、学歴や技術、初期投資をかけなくても現金収入を得ることができるのは、ハノイのロンビエン市場である。誰もが出入りできるため匿名性もある卸売市場では、自由に働くこともできる。

すでに技術をもっていたり、都市で人的ネットワークを築くことができたりすれば、より都市民と接合する機会を得ることができる。本稿で挙げた2人の女性（フエ、リュエン）は、それぞれハンホーム通りの塗料販売店に卸売業者と販売員というかたちで関わって、村落では得られない情報を獲得してきた。リュエンは卸売市場での果物運搬を通して、年々増える南ア、オーストラリアなどからの輸入果物を直に知り、国際性も日々感じ取っていた。情報を得る結節が都市というのは、都市の機能である。これが、彼女たち村落出身者に国際的な機縁として結びついた。外、つまり海外にまで目が向くようになったのである。

都市は情報拠点になっているが、現代のグローバル化時代はより複合的になっている。都市ハノイでの出稼ぎは、彼女たちに次の世代（自分の子ども）に国際的接触のきっかけを与えた。フエは自分の息子を当時ベトナムの都市の若者が対象だった技能実習生にさせるため、仕事上のつきあいがあった都市民のコネクションを利用した。こうして、村落から日本に出稼ぎ労働の機会を得た。本稿での事例は、村落から日本へ渡った若者労働者の黎明期である。リュエンは、都市でさまざまな情報を得て精査し、自分の子どもに自分のような苦勞をしない生き方をさせようと、常に模索してきた。自分の娘を大学に進学させるために、ハノイで生活する親族や店主から学費を前借りした。息子を韓国系企業に就職させて安定した収入を得られるようになると、息子の給与の大半も娘の学費に充てて工面してきた。息子の安定した給与をあてにして、共同で投資目的の家も購入した。娘が無事大学を卒業しても、今度は娘の結婚式の費用を調達するため、塗料販売員よりも収入を得られる市場でのリヤカー運搬労働を続けた。出稼ぎ労働者も、都市を巧みに生きているのである。

リュエンが村から出てきて働き始めたロンビエン市場は、多くの出稼ぎ労働者の都市への入り口になっている。人も時間も融通がきく市場は、このグローバル化時代に村落から日本へ技能実習生として働き、帰国した若者も受け入れる。このような匿名性ある空間も都市性である。



市場経済開放によって、村落という限定された領域から都市に出てきた出稼ぎ労働者が、都市でさまざまな人と出会い、情報を得て共有して生き抜いていく。「都市が最下層から富裕層まで包摂する」から、いつでも「村落性—海外性」「デジタル—アナログ」「自力—共同」をつないで変換できる生き抜きの「場所」になっている。本稿は、村人が都市を経て国際社会とつながっていく動態を描くとともに、ここに都市性を確認したのである。

**謝辞** 本稿は、調査対象者および関係者との信頼関係のもとに得た資料に基づいている。本稿を執筆するにあたって承諾してくれたリュエン、トゥアンアイン、フエ、チュオンに、この場を借りて謝意を表したい。

本研究は、JSPS科研費 JP19K01209の助成を受けたものです。

## 註

- <sup>1)</sup> フエの夫が1979～1986年までハノイに出て発注と運搬をしていた。それ以降は、フエが代わってハノイに出ている。
- <sup>2)</sup> 前に勤めていた塗料販売店は廃業したので、ハンホーム通りの別の個人経営の店で働くことになった。
- <sup>3)</sup> 2019年にはハノイの郊外ミーディン区の戸建てに転居した。姉のトゥエンも同居している。ヒエンの娘のタオは結婚して娘が1歳、トゥエンに面倒を見てもらって仕事をしている。
- <sup>4)</sup> 予定していなかったアイラインも施術してもらい、1,000,000ドンを支払った。普段化粧せず、結婚式などハレのときに美容院で施してもらう程度だった。
- <sup>5)</sup> 2019年の研究ノートでは、約5,000円としたが、2012年8月26日付けの筆者の記録では、預かり代が150,000ドン（約750円）となっている。ベトナムの経済事情を踏まえると、こちらのほうが正しいと判断した。

## 参考文献

- 石塚二葉 2014「ベトナムにおける国際労働移動—「失踪」問題と労働者送り出し・受け入れ制度—」『東アジアにおける移民労働者の法制度：送出国と受入国の共通基盤の構築に向けて』179-213。
- 加藤丈太郎 2019 'A Case Study of Vietnamese Undocumented Migrants, Students and Technical Interns : What Distinguishes Vietnamese People Who Remain 'Legal' and Those Who Become 'Illegal'?' 『アジア太平洋研究科論集』38:35-53。
- グエン・ティ・ホアン・サー 2013「日本の外国人研修制度・技能実習制度とベトナム人研修生」『佛教大学大学院紀要』41:19-34。

- 長坂康代 2010「路上茶屋からみたベトナム都市民衆のコミュニティ形成—首都ハノイ・旧市街のハンホーム通りを中心にして」『食生活研究』30(6)9-22。
- 長坂康代 2011「ベトナム・首都ハノイの同郷会をめぐる都市人類学的考察—同郷会における都市内の活動と都市—村落関係—」『東南アジア—歴史と文化』40:79-99。
- 長坂康代 2014「都市生活困窮者をめぐる相互協力の地域社会学—日本の中核都市名古屋とベトナムの首都ハノイの比較社会論—」愛知大学『一般教育論集』47:53-65。
- 長坂康代 2015「ベトナムの首都ハノイの運搬と流通をめぐる経済人類学」『金城学院大学論集』11(2):162-176。
- 長坂康代 2018a「台湾の桃園市におけるベトナム人コミュニティ：セーフティネットのあり方をめぐって」愛知大学『一般教育論集』54:59-68。
- 長坂康代 2018b「ベトナムから韓国への労働移動—ベトナム流コミュニティの形成と改変」栗田和明編『移動と移民—複数社会を結ぶ人びとの動態』昭和堂145-173。
- 長坂康代 2019「ベトナムの首都ハノイの市場で働く出稼ぎ労働者たち—ロンビエン卸売市場を事例にして—」愛知大学『一般教育論集』56:41-51。
- 二階堂裕子 2019「外国人技能実習制度による国際貢献に向けた課題—ベトナムにおける農業分野の技能移転の可能性—」『西日本社会学会年報』17:47-61。
- 西川直孝 2019「ベトナム人技能実習生の就業状況に関する調査—就業選択工藤と収入を中心に」『Migration Policy Review』11:114-127。
- 松本尚之 2021「遠い日本から民族独立を願う—日本に暮らすイボ人たちとピアフラ戦争」『季刊民族学』176号 2021年春 18-25。
- 新潟県労働局「新潟県における外国人雇用状況の届出状況」  
<https://jsite.mhlw.go.jp/niiigata-hellowork/content/contents/000811599.pdf> (2021年9月26日)